HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アウグスティヌスの社会思想
著者	小林，淑憲；KOBAYASHI，Yoshinori
引用	季刊北海学園大学経済論集，70(1)：1-8
発行日	2022-06-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《研究ノート》

アウグスティヌスの社会思想

小　林　淑　憲

マニ教徒としてのアウグスティヌス

アウグスティヌス（354－430）の生涯について，時に寄り道しながらも多少詳しく紹介するが，それは生涯における様々な経験が，彼の社会思想に非常に良く反映されているからである。

早くからギリシアやローマの文化が流れ込んできていた北アフリカのヌミディア州タガステで，異教徒の父パトリキウスと敬虔なキリスト教徒の母モニカの間で生まれた。したがってアウグスティヌスは幼い頃からキリスト教に親しんでいたことになる。地元の学校で初等教育を受け，次いでマダウラでギリシア・ローマの古典の読解と作文を学ぶ。さらに故郷タガステのある資産家から学費の援助を受けて，16 歳でカルタゴへ遊学し，法廷弁論術を学ぶため修辞学の勉強をした。その過程において，彼は弁論家として名高かったキケローの思想に触れる。特に，今では断片しか残されていない『ホルテンシウス』によってアウグスティヌスは「知恵の愛」に目覚め，彼はこれを読んだことで哲学に非常に興味を持ったという。

アウグスティヌスは，若い頃は相当に放蕩息子だったようで，勉強が嫌で，悪友と連れだって盗みを働いたという。ただ盗みたいがために梨を盗んで豚に投げてやるのが面白かったと言っている。また酒色に耽り，自堕落な生活を送った。アウグスティヌスは 397 年から 400 年頃執筆した『告白』に，梨の窃盗だけでなくさまざまな自分の悪行を赤裸々に綴っているが，これは単なる自伝ではなくて，悪いことだと承知の上で，いかに悪さをしていたかを神に告白するとともに，悪いことであると認識しながらそれを行う人間の業を訴えているものと思われる。

ところでアウグスティヌスの社会思想を理解する上で，彼の生涯について重要なポイントがいくつかある。第一に，カルタゴへ遊学していた 19 歳の頃に，マニ教に魅せられて，その信者になったことである。『ホルテンシウス』を読んだアウグスティヌスは，真理を求めたが，最初『聖書』を読んでもそこにキケローほどの荘重さも真理も見いだすことができなかった（『告白』第 3 巻 5 章）。そこで彼が真理を求めたのはマニ教であった。よく知られていることだが，マニ教はペルシア人マニ（215－275）が，世界は二元的に構成されていると考える 2 つの宗教すなわちゾロアスター教とグノーシス主義の影響下に始めた禁欲主義的な宗教で，ペルシアばかりでなくローマ帝国にも広く伝播した。マニ教は，世界を，善である光の原理と，悪である闇の原理との相克・戦いとして捉える。神と悪魔の戦いである。アウグスティヌスにとって，世界が善と悪の二原理からなっているというマニ教の説は，善を願いながらも欲望に囚われ悪をなす自分の人生を基に考えた世界をうまく説明できるものと思われた。しかしマニ教も結局，彼を十分に説得させることはできなかった。当時の代表的なマニ教の司教の説に納得できなかったからである。

その後，383 年にカルタゴからローマへ渡り，またミラノへ行く。ミラノで修辞学の教師を務めた。彼の思想的営みの第二の転換点は，このミラノにおいて司教アンブロシウス（333 頃－397）に出会ったことである。アウグスティヌスはアンブロシウスと交流するうちに，質素な生活に甘んずる彼の人格に惹かれ，またその説教によってキリスト教の内容に関心を高められるようになった。こうしてキリスト教に対する誤解を解き，32 歳のときにマニ教を捨てて回心し，翌年アンブロシウスの洗礼を受けた。

オリゲネスとプロティノス ── プラトンの流れをくむ思想との遭遇

上述の通り，アウグスティヌスがマニ教を脱してキリスト教徒になったキッカケは，直接にはアンブロシウスとの交流にあると考えられているが，アウグスティヌスが活動していたミラノには，プラトンの流れをくむ思想が広まっており，当時のキリスト教は大いにその影響をこうむっていた。当時ミラノには「ミラノのサークル」と呼ばれる新プラトン派の知識人グループが存在するほど（宮谷宣史『アウグスティヌス』II，６），新プラトン派の思想は受容されていた。元来，感覚や現象を超越したイデアの世界と，視覚を始めとする感覚によって捉えられる可視的世界とを区別したプラトンの思想は，感覚を超えた神の存在を大前提とするキリスト教と親和的であり，その意味でキリスト教に受け入れやすかったといって良い。

紀元前 2 世紀半ばのアレクサンドリアにおいて，プトレマイオス朝エウエルゲテス 2 世（在位前 145－前 116）が学者達を追放したことでアリストテレス哲学は衰微したが，その一方で，アレクサンドリアのトラシュロス（？－36）によって『プラトン著作集』が編纂された紀元 1 世紀以降，プラトン哲学復興の気運が高まった。とりわけ紀元後 3 世紀，４世紀にはプラトンの思想は数多くの哲学者・神学者によって多種多様に解釈されたことが知られている（『新プラトン主義を学ぶ人のために』第 1 章）。

その代表としてオリゲネス（185 頃－254 頃）やプロティノス（205－270）らの名前を挙げることができるだろう。ギリシア哲学とキリスト教とを初めて統合したと評価されるオリゲネスは，アレクサンドリアの裕福な家庭に生まれ，後世，新プラトン派の創始者とみなされることになるアンモニオス・サッカス（175－242 頃）に指導を受けたと言われている。その後学校を開き，後にパレスチナのカイサレイア・マリティマに移ってやはり学校を開いたと考えられている。数多くの聖書注解を遺したが，それ以外にも護教論を展開したり，聖書講話を執筆したりした。死後 400 年経った 6 世紀にはユスティニアヌス帝によって異端宣告を下される。著作として最もよく知られているのは『諸原理について』である。

グノーシス主義やゾロアスター教の，善悪二つの神の対立すなわち霊魂の善と物質の悪という二元論に対抗して，オリゲネスは，神に優れた部分と劣った部分を見るべきではなく，「万物の始原」であり「父」である神は，あくまでも「同じ一なる神」として単一の精神であり，「物理的な場所も，感覚的な大きさも，物体的形や場所も」必要としない超越的な存在であるという（『諸原理について』第 1 巻 1 章，第 2 巻 4 章）。オリゲネスの神概念は中期プラトン派に多くを負っているといわれるように（『キリスト教的プラトン主義』第 1 章），オリゲネスの神はイデアの特徴を有していると考えてよいであろう。

しかも，オリゲネスは一方でプラトンに由来するとは思われない自由意思の概念を使用することで神の正しさを論じつつ，他方で魂の不死を前提として，人間がその自由意思によって善から

悪へ転落したり，悪から善へ改心しうることを主張しているのである（『諸原理について』第3巻1章23節)。近年の研究ではアウグスティヌスにおけるオリゲネスの負債が明らかにされつつあるが，こうしたオリゲネスの思想はアウグスティヌスにとって示唆に富むものであっただろうと推測される。

これに対して，3世紀にアレクサンドリアでギリシア哲学を学び，ローマへ渡ってプラトンやアリストテレスの哲学を講義したのがプロティノスである。オリゲネスに対して，プロティノスがアンモニオス・サッカスの教えを受けたことはしっかりとした根拠がある。プロティノスの弟子にはポルフュリオス（234－305以前）がいて，この弟子は師匠についての伝記『プロティノス伝』を残している。彼らは後世「新プラトン派」と名付けられた。プロティノスの聴講者は多様であり，医者や詩人ばかりでなく，元老院議員や法務官などの貴族もあったという（『プロティノス伝』7)。プロティノスの思想は，ポルフュリオスによって全6巻各9章からなる『エンネアデス』にまとめられた。プロティノスは「新プラトン派」の実質的な第一人者とされるが，グノーシス主義や占星術を批判した点から，プラトンの思想を応用した哲学者と評価されている(『プロティノス全集』第1巻『プロティノス入門』)。

プロティノスは，あらゆるものの中で最大にして不可分の能力を持つ「一者」すなわち善を想定する。これはプラトンのイデアに由来する。善とは「万物のはじめ」であるので，一切はこの善から産出されるという。また善は人間にとってあらゆる「努力の目標」であると言い（『エネアス』IV，9，3)，さらにプラトンに直接言及してその権威に依拠しつつ，善の認識が「最重要の学びごと」であるという（『エネアス』VI，7，36および『国家』505A)。プロティノスはオリゲネスと同様に，グノーシス主義などの善悪二元論に反対して，悪は「善を全く欠いているところにあらわれる」として，善が欠如した状態と考えた（『エネアス』I，8，1)。そして悪は「真実在の影」としての素材であり，この場合，素材が悪の実体として，あらゆる「他のものの基体」をなしていると断言する（『エネアス』I，8，3節および10節)。唯一の神が世界を善なるものとして創造したと考えるアウグスティヌスやその800年後のトマス・アクィナスは，プロティノスのように悪を実体と見ることは当然できなかったのであるが，悪を善の欠如とみる見方は，彼らにも受け継がれていくことになる。

キリスト教の司教として

アウグスティヌスはこのようなプラトン哲学の隆盛という状況下に，マニ教を棄(す)てた。その理由について，彼はプラトンの流れをくむ懐疑派に言及して「アカデメイア派と呼ばれる哲学者の方が他の哲学者たちよりも賢明であったという考えがまた私に起こったからである。彼らはどんなことについても疑われねばならないと考えて，どんな真理も人間によっては捉えられることはできないと考えていた」と明言している（『告白』第5巻10章)。彼は代わりにプラトンの哲学を高く評価するようになった。その自然哲学（存在の原因）や論理学（認識の根拠)，道徳哲学(生活の基準）は他のいかなる哲学よりも優れているとしたが，そのように考える理由は，プラトンがキリスト教の「信仰が支持し擁護する真の宗教に賛成」しており（『神の国』第8巻4章)，「神を認識することによって，世界の創造の原因，真理の認識の光，浄福を味わう源泉がどこにあるかを見いだした」点にあると断言している（『神の国』第8巻10章)。しかしながら，アウグスティヌスにとってそもそもプラトンおよび新プラトン派の思想は多神教を前提とする上に，

キリストの受肉も神に対する謙遜な態度も見られない点を不十分と考え，彼はキリスト教に接近するのである。

アウグスティヌスは，キリスト教徒になって後には，しばらくしてから北アフリカに帰り，教会の要職に就き，様々な論争に参加するようになる。特に 396 年からは北アフリカのヒッポの司教に叙階し，数々の訴訟において判事を務めたり，マニ教やドナトゥス派，ペラギウス派などと論争したりする。その最大の成果が，彼の代表作であり，全 22 巻の超大作『神の国』である。古代において地中海の海上貿易で栄えたフェニキア人が作った商業国家カルタゴはローマと戦争を繰り返したことから反ローマ的気質を受け継いでいた。このカルタゴに現れたドナトゥス派は，ディオクレチアヌス帝の大迫害に加担した人物（背教者）によるカルタゴ司教の叙任を認めなかった。独自に自分たちの司教を立てたが，その後継者がドナトゥス（生没年未詳）である。教会の分裂を恐れたローマの教会はそれでも元背教者の地位の正当性を認めたため，ドナトゥス派はこれを認めなかった。アウグスティヌスは，５世紀初頭の教会会議において，ドナトゥス派と論争して，説得しようとしたが叶わず，カトリック教会はこれを異端として弾圧したため，ドナトゥス派は急速に衰退したという。

さて『神の国』執筆のキッカケは，ゲルマン人西ゴート王アラリック（Alaricus，370 頃－410）が 410 年にローマを攻略したことにある。紀元 410 年と言えば，キリスト教が国教化されてまだ 18 年しか経っていない。４世紀から５世紀にかけてキリスト教徒が激増したとは言え，ローマ帝国内には様々な宗教を信じている人々が多かった。キリスト教から見れば異教徒であるが，このときその異教徒たちはキリスト教を非難した。つまり西ゴート族によるローマ攻略という大きな災いが起こったのは，祖先伝来のローマの神々を捨て去って，東方から起こったキリスト教などという，いわば新興宗教を信じるようになったことの報いであるという非難である。これに対してキリスト教を弁護しようとしたのが，この『神の国』である。アウグスティヌスが護教論者とされるゆえんである。

晩年は，ヴァンダル族が北アフリカに攻め入ってきて，ヒッポを包囲した時，飢餓と恐怖に戦おののく人々を助ける活動をしているうちに熱病にかかって死んだという。

アウグスティヌスの人間観

異教徒たちによるキリスト教非難に対して，アウグスティヌスは，人間とは何か，人間の堕落とは何か，教会とは何か，教会と国家との関係，歴史はどのように営まれているかといった様々な問題を論じている。ここでは『神の国』をアウグスティヌスの人間観および教会観，国家観について検討する。

アウグスティヌスの人間観は，霊と肉に引き裂かれて煩悶し続けた自己の人生を反映していて，非常に二元的である。人間には霊的側面があり，かつ肉的側面があるという。また，人間は霊的存在になり得るし，肉的存在にもなりうると考える。ただし，アウグスティヌスがしばしば使うこの「肉的」という言葉の意味については，確かにアウグスティヌスは，若い頃に肉の欲望の虜になったと告白しているが，思想的作品の中で使っている「肉的」という言葉は，精神の悪徳の意味も含んでいるとも言っている。

「使徒が明白であると断言し，列挙して，それを非としたところの肉の働きの中に，私たち

は淫行，汚れ，好色，泥酔，そして遊蕩というような肉の快楽に関わる事柄だけを見いだすだけでなく，肉の快楽とは関わりのない精神の悪徳が証示されるところの事柄をも見いだすのである。実際，偶像に対して差し出される礼拝，魔術，敵意，争い，嫉妬，怒り，分裂，分派，そねみのようなものを，肉の悪徳としてよりは，精神の悪徳として解さぬものがあるであろうか。」(『神の国』第 14 巻第 2 章)

人間は霊と肉の二面性を持った存在としてアウグスティヌスは考えている。マニ教に魅せられていたままのアウグスティヌスであれば，この世の善と悪はともに根源的なものと考えたであろうが，キリスト教の信仰を持った彼には，もはやそのように考えることはできなかった。神が善とともに悪も作ったということになってしまうからである。そこで彼は悪は神のせいではなくて人間のせいであると考える。

当時のローマは異民族の侵入によって混乱し，厭世的な世界観が蔓延していたが，アウグスティヌスは，この厭世観と戦わねばならないと考えた。聖書によれば，元来，神は，世界を計画するに当たって，存在するもの全てが善であるように世界を創造した。即ち神の目からすれば，世界の本質それ自体は善である。そうであるとするならば，どうしてこの世に自然災害や疫病などの外側からの悪ばかりでなく，人間自らが悪と認識しながらもあえて悪をなすのかという問題になる。しかも人間は，他の動物とは異なって，もともと「神の似姿（Imago Dei)」として創られた，神に似せて創られた高貴な存在だったはずである。それが悪をなすことがあるのはどういう訳か。

アウグスティヌスはその理由を人間の自由意思に求める。もともと人間は神に従うことも神に従わないこともできるように創られた。ところが善を選び取るべき自由な意思はその弱さゆえに悪を選び取った。アウグスティヌスはおそらく新プラトン派に触発されたものと思われるが，悪を「善の欠如に外ならない」と断言する（『神の国』第 11 巻 22 章)。そして人間の自由意思がいかに神に反逆したかを次にように述べている。これは人祖アダムとエヴァが禁断の木の実を食べて，神の命令に背いたとき，自分たちの体が裸であることに羞恥心を感じ，いちじくの葉で前を隠したという説明のあとに続く。

「事実，魂は今やそれ自身の自由によって転倒していくことを喜んだのであって，神に仕えることをさげすみ，肉体が受け持っていたかつての従順な役割を捨てることになったのである。そして魂は，その自由意思をもって自らの上に存在する主人を見捨てた故に，自らの下に仕える僕をその意思のもとにしっかりと保っておくことをしなかった。魂は自らの肉を，もしも自己を神のもとに従順なものとして保ち続けていたならなしえたように，あらゆる意味において自らに従順なものとして所有することはできなかったのである。まさにこのとき，「肉ののぞむところは霊に反する」ことを始めたのであった。私たちはうまれつき，この争いと共にあるのである。」(『神の国』第 13 巻 13 章)

このように，アウグスティヌスは，悪の存在を自由意思の濫用に帰し，人間を両義的な存在として理解する。人間が善をなすのも悪をなすのも意思の問題だという議論である。そうするとこの議論からは一見，人間に対して，悪の限りをなすのではなく，自分の意思によってできるだけ善い行いをせよ，そうすれば魂の救済が得られると示唆しているのではないかと見える。しかし

アウグスティヌスは，人間が自分だけの力で善行ができるとか，救済されるとか考えず，そのためには神の恩寵が必要だと考える。

アウグスティヌスは，晩年，ペラギウス（？－418 以後）及び彼の支持者と，自由意思の評価を巡って論争し，いわゆる「恩寵論」を展開した。ペラギウス派は人間性に関して非常に楽観的で，堕落は祖先から受け継がれたのではなく，個人的なものであって，人間は神の恩寵によらなくても自由意思の働きのみによって救いに至ると考えていた。これに対してアウグスティヌスは，人間は自由意思は与えられたけれども，それを悪用した結果，罪ある状態に陥った。そして自分の意思と力だけでは到底罪ある状態から救済されない，神の恩寵なしには救済は不可能であると考えた。

> 「というのは，意思はその自然本性においては善であられる神によって善きものとして作られているのではあるが，しかし，無から作られたものであるからには，不変なる存在によって可変なるものとして作られたのだからである。したがって，この意思は善からそれて悪をなすことができるのである。このことは意思の自由な決定力によってなされる。同時にそれは，悪からそれて善をなすこともできるのである。しかしこの場合は，神の助けなくしてはあり得ない。」（『神の国』第 15 巻 21 章）

このようにアウグスティヌスは，人間に自由意思を認めながら，人間はその罪深さから誤りを犯しがちであり，それを防いで善き行いをなすためには神の恩寵が必要だと主張することで，カトリック固有の人間観の基礎を築いた。

教会観と国家観

既に述べたように，キリスト教が成立してしばらく経ってから，人々は，いつまで経っても終末が来ないと思い始めていた。これはキリスト教とキリスト教教会にとっては非常に深刻な問題である。つまり，ゲルマン人の侵入によってローマ帝国が危機に瀕したのはキリスト教を信じたからだという指摘は，基本的には外側つまり異教徒からのものであり，かつ，キリスト教の原理それ自体を否定するものではない。しかし，いつまで経っても終末が来ないという意識は，キリスト教の世界観それ自体を疑問視した根本的批判として，深刻に考えざるを得ない。このような疑いに答えるべく，アウグスティヌスは著作『神の国』の中で，人類の歴史を論ずることでキリスト教を弁護しようとする。

アウグスティヌスによれば，人類の歴史とは，全人類の救済という神の目的に向かって進んでいく過程である。その全てのプロセスを，アウグスティヌスは『旧約聖書』の世界創造の場面から，アダムの創造，アダムとエヴァの堕落とか歴史の節目ごとに逐一解説していって，時折，論敵に反論しながら最後の審判が下された後までのことを論じている。アウグスティヌスはこのように人類史を概観することで，キリスト教の要点を異教徒に対して解説すると同時に，論敵を批判することでキリスト教を弁護した。

この全人類の救済という目的に向かって進む過程は，神の国（civitas dei）と地の国（civitas terrena）という二つの国の対立として描かれる。この神の国と地の国という二つの国のうち，神の国は神の「報償によって善き天使たちの仲間に加えられた」人々からなる国であり，これに

対して，地の国は神の「罰によって悪しき天使たちの仲間に加えられた」人々からなる国である。そして最後の審判に至るときまで，互いに混じり合って存在すると言う。そして最後の審判に際して，地の国が全く消滅して神の国だけが残る。

このようにアウグスティヌスは，終末の到来が約束されたものであることを系統的に論じている。こうした議論が，終末の到来に対する疑問をもっている人々に対してキリスト教とキリスト教会を弁護する役割を果たしたであろうし，またそうした人々を説得しなければならないカトリック教会の聖職者たちに対して，キリスト教と教会を弁護する拠り所を与えたであろうことは容易に想像できるであろう。ただし「神の国」と「地の国」とが具体的には何を指しているか，諸説あり定説はない。少なくとも単純に「神の国」＝教会，「地の国」＝国家という図式を当てはめることはできない。

これら二つの国は，その原理を異にする。神の国は「自己を侮るまでになった神の愛」によって創られた国であり，そこでは「良心の証人であられる神において最も高いほまれ」が見いだされるという。これに対して，地の国は「神を侮るまでになった自己愛」によって創られた国であり，「人間からほまれを求める」とされる（『神の国』第 14 巻 28 章）。上述のように人類の歴史においてはこの二つの国は互いに混じり合って存在している。したがって，ここに示唆されているのは，この世においては教会であろうと国家であろうと，自己愛に対して神への愛を尊重する場合と，神への愛をないがしろにして自己愛を優先する場合の相矛盾した人間の傾向である。もちろん同一の人間がどちらの愛にも向かう可能性は否定されない。

とすれば，アウグスティヌスはこの世において純粋な善，純粋な悪というものは存在していないと考えていることになろう。現に存在する教会も完全に肉的側面を欠くものではなく，現に存在する国家も霊的側面が全くないわけではない。したがって，アウグスティヌスは，周囲にまだ異教徒が多く存在するキリスト教が国教化されてまもない時代に，またローマが異民族によって攻略されるという非常に混乱した時代状況にあって，教会や国家の価値を容認しながら批判するという非常に複雑で特異な認識を示していると思われる。

教会には，「神と人との間の仲保者［十字架の死によって人類の罪を贖い，神と人の間に立って人類の救済を実現した人］」であるイエス＝キリストを首長とする身体・肢体としての役割が期待されている（第 10 巻 20 章）。また実際，教会には「この世にあって旅を続ける神の国の象徴的な像」（第 15 巻 26 章）という形容もされている。こうしたことからアウグスティヌスは，キリスト教会が「選ばれた者」と「斥けられた者」の「両者が区別されることなく網に囲まれて泳いでいる」（第 18 巻 49 章）と表現されているように，清い者と清くない者とを抱えつつ，洗礼や告解の秘蹟を執行することによって，人々の救いにいたる通路としての役割を続けていくことを期待していると思われる。

また，実在の国家に対しては，一言で言えば必要悪として見ていると考えられるであろう。確かにアウグスティヌスは国家を盗賊団と同等のものと見ている節がある。これを「国家盗賊団説」という。『神の国』第 4 巻 4 章にそれを伺うことができる。すなわちアレクサンドロス大王が海賊に向かって海を荒らす理由を問うたとき，海賊が答えるところでは，自分は小さな船で掠奪するので海賊と呼ばれるに過ぎず，大王は大艦隊で海を荒らすので皇帝と呼ばれるに過ぎないという。要するにアウグスティヌスは基本的には国家を盗賊団と大して変わらないものとして否定的に見ている。

そうであるとは言え，アウグスティヌスは国家に消極的な存在意義をも見いだしている。まず

人間は自分にとって身近な家族共同体よりも，人間社会そのものに対する配慮はしにくいと述べている（19 巻 14 章)。彼にとっては国家よりも家族の方が人間の自然本性に適合的であった。また彼は国家というものは，支配欲にまみれた支配者によって人々が支配されている状態と述べているが（序文)，この国家には，支配が行われていない状態よりはましであるという価値判断が下されている。

「無節度な人間から不正をなす自由を除去する時には…人々に有益なものとなるがゆえに，これは正しいのであるというのである。また，支配されている人々はよりよい状態にあるからである。と言うのは，支配されなかった時はもっと悪い状態であったからである」（第 19 巻 21 章）

このように国家はそれが存在しない場合よりも次善の，必要悪として認識されているということになる。

アウグスティヌスはそもそも人間は神の命令に背いた堕落した存在だと見ている。そのような罪深い人間には，この世における様々な悲惨な状態が神から罰として与えられたと考える。その典型が奴隷制度であるが，それと並んで国家もまた人間の堕罪によってもたらされた罰として見ているのである。

「したがって，奴隷の状態の第一の原因は罪であって，その結果，人間はその境位の拘束を受けて人間に服従せられるのである。これはいかなる不正もない神の裁きによってのみ起こるのであって，神は罪を犯した者のその値に従って異なった罰を割り当てることことを［神の人ダニエルは］知っておられる。」（『神の国』第 19 巻 15 章）

参 考 文 献

『告白』（上下)，『神の国』（1）～（5），岩波文庫
『アウグスチヌス著作集』全 30 巻，教文館
『自由意志論』今泉三良訳，創造社，1966 年
『三位一体論』中沢宣夫訳，東京大学出版会，1975 年
オリゲネス（ネメシェギ責任編集，小高毅訳）『諸原理について』創文社，1978 年
『プロティノス全集』1 ～ 4 巻，別巻，田中美知太郎監修，水地宗明・田之頭安彦訳，中央公論社，1987～1988 年
研究書など
古賀敬太『西洋政治思想と宗教　思想家列伝』風行社，2018 年
柴田平三郎『アウグスチヌスの政治思想』未来社，1985 年
山田晶『アウグスチヌス講話』講談社学術文庫，1995 年
宮谷宣史『アウグスティヌス』講談社学術文庫，2004 年
上智大学中世思想研究所編『中世の社会思想』（創文社，1996 年）
水地宗明，山口義久，堀江聡編『新プラトン主義を学ぶ人のために』世界思想社，2014 年